

**阪神・淡路大震災
追悼礼拝
社会部主催・
教区防災学習会**

1995年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災から今年で24年目となりました。

1月17日(木)阪神・淡路大震災復興記念聖堂である神戸聖ヨハネ教会(神戸市須磨区)で阪神・淡路大震災24年追悼礼拝が小林尚明主教司式のもと執り行われ、教区内外から約50名の方々が参加されました。礼拝の奨励は、同教会信徒の飯田恵二さんが震災当時のことを語られました。

被災者証言

飯田さんは震災時、神戸市東灘区の自宅で被災されました。自宅2階で眠っておられた時、強い揺れと共に天井が落ちてきたことよってご夫婦で身動きがとれなくなってしまうしましたが、約1時間後に近所に住んでいた若い方々によって救助されました。この前日、飯田さんのご家族が家に帰ってくる予定でしたが、急遽予定が変わり1月17

日に家にいたのはご夫婦だけでした。震災によって、ご家族が眠るはずの部屋は崩れてしまったので、前日の予定変更は奇跡、ととってもいい出来事だったのです。

飯田さんご夫妻は、救助された後、すぐに近くの体育館へ避難されました。そこから被災した自宅へ通い、片付けをしていた時、当時のヨハネ教会牧師・中村豊司祭が訪ねて来てくださり、涙ながらに抱き合われたそうです。



震災から4日後、飯田さんの職場が大阪府豊中市に社宅を用意してくれたので引越すことになりました。当時の神戸は多くの場所で水道、ガス、電気が止まった状態で、買い物もなかなか出来ない環

境の中、東灘区から電車で約30分の豊中市では、スーパーマーケットに電気が点き、人々の生活も普段のままだったことに飯田さんご夫妻は、驚かれたそうです。また引越した先の近所の方々に震災で被災した神戸の様子を話しても、震災の様子をなかなか理解してもらえませんでした。

飯田さんは、被災者の言葉が被災地以外の人々になかなか理解してもらえないことから、他者に言いたくても言えない被災者の声を聴く、「傾聴」の役割が大切だと語られました。

非常食を体験

礼拝後、地下ホールで非常食用のカレーやうどん、缶詰



パンと缶詰おにぎりの昼食をいただきました。今回用意された非常食は、5年間保存でき、開封時もお湯やレンジなどの温めが必要なく食べられるものです。

防災講習

同日13時から社会部主催の防災講習会が行なわれました。今回のテーマは「救命」。講師は、山根嘉樹氏(NPO法人神戸ライフセイビンクラブ理事長、日本赤十字社指導員)とメンバーの方々。講習では、主に人工呼吸、心臓マッサージ、AED(自動体外式除細動器)の使用方法について学ぶことが出来ました。



形を使って心臓マッサージや人工呼吸、AEDを実践しました。

1つの課題

取材をした筆者も阪神・淡路大震災の被災者の一人です。震災から今年で24年の時が経ち、当時10歳だった筆者も今年で35歳になります。その一方で現在24歳以下の方々は、阪神・淡路大震災の体験を他者から教えて頂く世代です。阪神・淡路大震災が徐々に過去のものとなっていく中で被災者をはじめとした私たち神戸教区は、自然災害を次世代へどの様に伝えていくことが出来るのか一つの課題だと感じました。

(広報部浪花記)